



ブリュッゲルの「子供の遊戯」 8

——竹馬ごっこから独楽回しまで——

森 洋子

46 竹馬(低い) 111 Op kleine Stelten loopen

(図1)

50の「竹馬(高い)「ごっこ」を参照。

47 盲目鬼のスリッパとり Blindenhoedje met

Stoffkentrek (図2)

15の「目隠し鬼「ごっこ」や、45の「盲らの鍋たたき」

などと共に、この遊戯も「盲目鬼」のヴァリエーションのひとつといえよう。帽子で目隠しされた少年が棒の先に紐をつけ、スリッパとか雑巾、ぼろ布などぶら下げ

る。元気のよい子供はスリッパを引張ろうとして、鬼をからかう。そこで彼は棒をふり回して、彼らを追い払う。他方、臆病者の子供たちはスリッパに当たらないように、素速く逃げる。こうして、体にスリッパが当たった子供が鬼となる。

なおドイツでは前世紀までこの遊戯は Plumpsack として、人気のあるグループ遊戯のひとつだった。それは結び目のあるハンカチ、帽子、靴、木片などを紐で棒に縛って遊具とするのであった。



図2 ブリュエゲル「盲ら鬼のスリッパとり」
 (「子供の遊戯」の部分⑧)



図1 ブリュエゲル
 「竹馬(低い)ごっこ」
 (「子供の遊戯」の部分⑨)

ヤがいもをあげ
 ているが、これ
 が南アメリカか
 ら北ヨーロッパ
 に伝播したのは
 一五六五年頃と
 いわれるので、
 時期的に少し早
 すぎるように思
 われる(ブリュ
 ーゲルの「子供

48 ひと山に命中させる Troppeltje schieten 塔に
 むかって投げる Naar den Torre werpen (図3)
 三人の子どもが地面の上に何か丸いものを下に三個、
 上に一個重ねて、山を作り、それを一定の距離から、同種
 のものを投げて、山を崩して遊んでいる。ド・マイヤー^{注1}は
 遊具として、じ



図3 ブリュエゲル「ひと山に命中させる」
 (「子供の遊戯」の部分⑩)

遊戯」は一五六〇年の制作)。すると、ナッツ、ボール、おはじき、石など、丸くて固いものなら、どんな対象でも遊具となりえたであろう。また子供たちはこれを「塔崩し」として遊んだらしい。もし塔がくずれたら、四個とも、その子供の所有となるが、失敗したら、逆に四個与えねばならない。

キリヤーンの辞書にも「ひと山作る」*hoopkens setten* とか「仔馬に当てる」*perdekens schieten*、「ナッツで倒す」*velden oft vellen met noten* という表現がある。

またラプレーは「城攻め」*au chastellet* と述べている。一六三二年の無名のドイツ詩人の歌にこう謳われている。

「あそこでナッツで遊ぶ子供たちは、
やがて大きなひと山の周りに集る。
ひとりが置き、他がねらう。
第三の子がそこへ投げ、
第四の子が失敗する。
何人かは静かに立ち、他は走る。

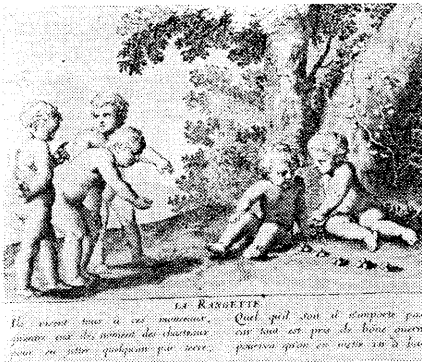


図4 クローディン・ブゾネ・ステラ
「ひと山に命中させる」(ジャック・
ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657
年より) 銅版画

笑う子もいれば、喧嘩する子もいる。
そんな風にして世界が回る。
ひとりが起き、他は倒れる。
ひとりが城や町を築き、
他はいかにしてそれを壊すかを
考えている。^{注2}

フランドルの詩人ジャック・ステラは『子供の遊戯と楽しみ』(図4 一六五七年)の中で、同じ遊びをこうフ

ランス語で謳っている。

「彼らの間でお城と呼んでいるあの山のどれかひとつを、地面に倒そうと、

あの可愛い子供たちがじっと狙っている。

どの山であってもかまわない。

すべては仲良しの戦争ごっことされている。

ひとつだけ地面に倒せばよい。」^{注3}

49 ぐるぐる廻り Rondraaien (図5)

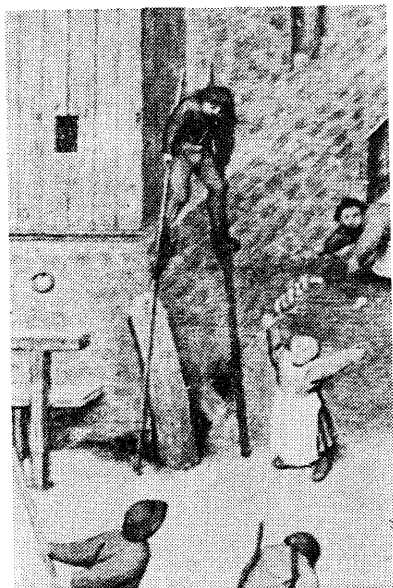


図5 ブリュエゲル「ぐるぐる廻り」
「竹馬(高い)ごっこ」(「子供の遊戯」の部分㊦㊧)

青い服の、白いエプロン姿の小さな女の子が、両手を
拡げて、鳥の真似をして目がまわるまで、ぐるぐる回
る。彼女はすぐ前方の、高い竹馬の男の子を感心してみ
ているのだ、という説^{注4}もあるが、その視線の方向か
ら、この鳥ごっこをしているのだらう。

50 竹馬(高い)ごっこ Staan op hooge Stelten (図5)

竹馬の遊びはすでに古代ギリシャ時代では *kathabatra*
ローマ時代では *grallae* として知られている。中世のネ
ーデルラントでは *stalle, schaeise* といわれていたが、
これは「松葉杖」という表現にも使われていた。竹馬の
材料はヨーロッパの場合、固い棒や赤楊林で作られるら
しい。50の竹馬の高さは、46のそれより約二倍以上である
が、この少年はおそらく近くの長椅子の背から、足をか
けたのであろうか。子供の背の高さや熟練さによって異
なるが、下から五〇センチないしそれ以上の高さに足台
(驚足)、オランダ語の *Mis* がつけられる。しかし台
があまりにも鋭角すぎると、足がその間にはさまれて

平均を失ない、十分スピードを出すことができなくなる。それだけでなく、重心を失い。前へ倒れる危険ささえも生じる。ゆえに、竹馬を作る場合、高さや台の角度やその位置など、十分に研究しなければならないのである。

ところで画面をよく注意すると、竹馬の乗り方がわが国とは違うことに気がつく。十七世紀の版画(図7、8)やタイル画(図9)、十九世紀の実物写真(図10)をみても、フランドルやオランダでは、足台はそれぞれの棒の内側につけられ、子供たちはかなり低い、ももの位置で棒を握っている。この方法は今日でも変りなく、毎年七月上旬に開催されるブリュッセルでの有名なオメハング祭(グラン・プラス広場で開催)でも、全く同じ乗り方での竹馬のデモンストレーションが行なわれる。

竹馬は元来、遊具というよりは大人の生活用具であった。例えば沼地を渡らねばならないとき、また羊飼いが遠方を見渡すときに竹馬を利用した。大市などの「竹馬競技」も、祝祭の人気ゲームのひとつであった。いや今

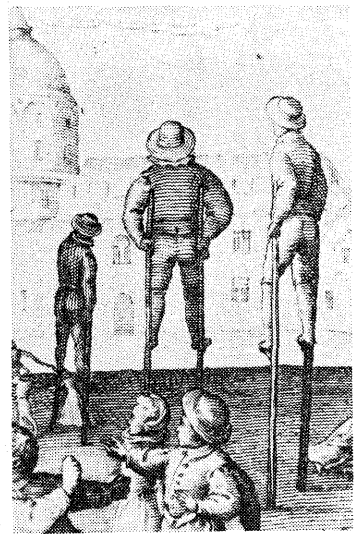


図6 マルテン・ド・ヴォス
「竹馬ごっこ」(「幼年期」の部分)
16世紀後半 銅版画

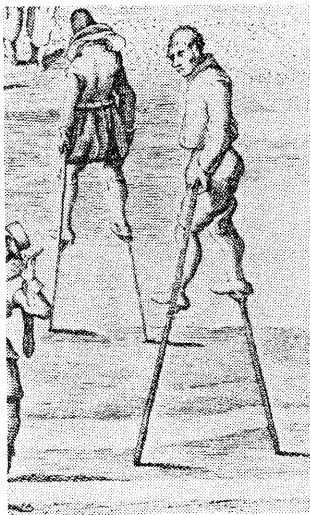


図7 「竹馬ごっこ」
(J・カッツ『道徳と愛の像』
1622年より) 銅版画

日でもフランスの西南部の砂丘地帯ランド地方では、羊飼いが竹馬に乗って羊の番をする習慣が残っている。

竹馬は中世ヨーロッパ文学の中でもこう謳われてい



図9 「竹馬ごっこ」オランダの版画の部分 18世紀



図8 E・シリマン「竹馬ごっこ」(J・カッツ『結婚について』1642年より) 銅版画

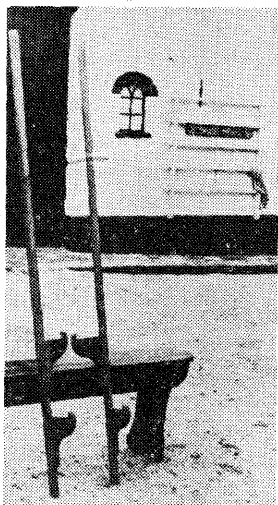


図10「竹馬」世紀高さ175cm 足台の高さ30cm, 58cm

あるが、それは子供たちがぶらさがったり、その上に乗ったりする格好の遊具であった。この絵でも二人の少年のうち、ひとりとは両足を交差させて

る。十四世紀のチューリッヒで書かれた一節であるが、「フロッシャウの岸辺、ヴォルフバツハから流れるところ、その川で秋、少年が竹馬に乗っている。その子はヴァルター・フォ

ン・ヴェイルといて、小川の中に小さな貝殻をみつけ、竹馬でそれを押しやる……」^{注5)}
ところが十七世紀になると、前述のようにカッツはこの「竹馬」に人生への教訓を比喩している。
「竹馬で歩く子供たちはまさしく怠かさの姿である。われわれは本当の姿よりも、大低、高くみせようと試みる。」^{注6)}
51 ぶらさがり」」 Aan de Balk tuimelen
(図11)

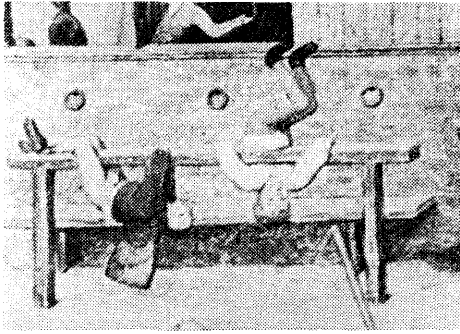


図11 ブリュエゲル「ぶらさがりごっこ」(「子供の遊戯」の部分⑤)

大きな建物の玄関口で、女の子が掃木を右手の人差し指にのせ、棒立て遊びをしている。世界中のどの国の子供も考える遊びだが、棒は掃木だったり、老人の杖だったり、また指の代わりに掌、鼻、額、靴の先などにのせてパランスを保つ。この遊びの時間は比較的短いし、またとくに規則というものもなく、独り遊びの場合も少なくない。しか

ぶらさがり、大きなカバンが落ちかかっている。他の少年ははずみをつけ、一回転しようとしている。

52 棒立てじゅじ Evenwicht (図12)

大きな建物の玄関口で、女の子が掃木を右手の人差し指にのせ、棒立て遊びをしている。世界中のどの国の子供も考える遊びだ

し二人で交代しながら、どちらが長く垂直を保つかを競うこともある。オランダのタイル画にはこうした二通りの情景がみられる(図13、14)。

53 子牛の脂または袋かつぎじゅじ Zalk-dragen

(図15)

同じ建物の入口の階段に、七、八人の子供が坐り、ひとりの女の子が近づくのを見ている。彼女は同じ背丈位の男の子を背負って、よろよろとこのグループのところ

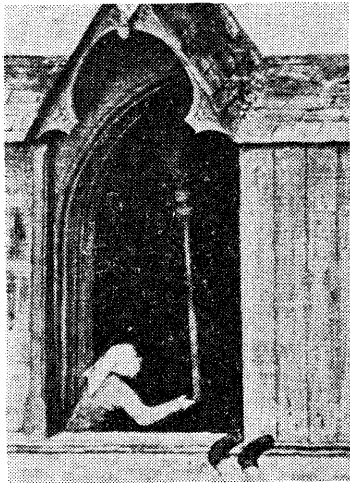


図12 ブリュエゲル「棒立てごっこ」(「子供の遊戯」部分⑥)

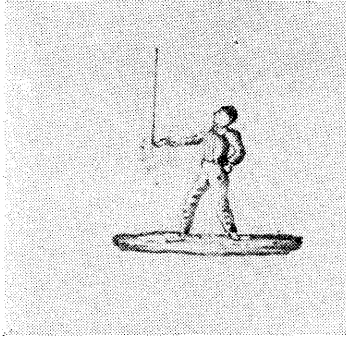


図14 「棒立てごっこ」1825年頃のオランダのタイル

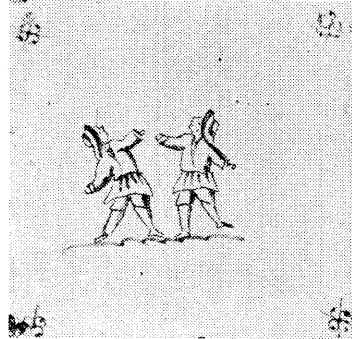


図13 「棒立てごっこ」18世紀のオランダのタイル

にやってくる。
 ド・マイヤー^{注7}や
 ハルトマンとレ
 ンスも、この遊
 びの内容につい
 ては、負者であ
 る女の子が勝者
 を背負っている
 のであろう、と
 推定しているだ
 けである。しか
 しこの少年が首
 に白いホウタイ
 を巻いているこ
 とから、あるい
 は病人ごっこを
 しているのだら
 うか。

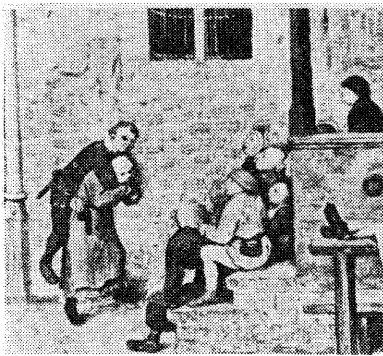


図15 ブリュエゲル「子牛の脂または袋かつぎごっこ」(「子供の遊戯」の部分^㉔)

他方、J・ヒルズはこの遊びに対して隠れんぼを考
 えている。^{注9}簡単に説明すると、ひとりの子供が壁にむかっ
 て立ち、目に手をあてながら、歌の一節を歌っている間
 に、他の子供たちは隠れる。鬼の子供が仲間を全部見
 けると、この遊びは終りとなる。この隠れんぼの一種に
 Peerd-in-delucht (空中馬)と呼称される遊びもあり、
 まず、AとBの二組に分れる。それからA組全部が目隠
 し鬼になり、B組の子供の隠れ場所を探す。A組のひと
 りがB組の子供を見つけると、B組の残りの全員がA組

の方へ走る。その時、見つけられたB組の子供がA組のひとりをつかまえると、その子供は「馬」になり、そのB組の子供を背負わなければならない。そこでヒルズは、このブリュッゲルの場面が、ちょうどこの段階を画いたものだ、と推定している。この遊びが隠れんぼとするならば、ラブレーの『ガルガンチュア物語』第二十二章でも“*A la cutte cache*”（もういいかい）の列挙がある。

54 投げ独楽 *Prikfol* (図16)

55 鞭独楽 *Driftfol* (図16)

同じ建物のアーケードの下は舗装した床で、五人の子供たちが独楽回しに夢中になっている。しかしよく見ると二種類の独楽がある。鞭を使って独楽のボディを打ちながら回す「鞭独楽」(はたき独楽ともいう) *driftfol* と独楽のボディに紐をかけて、地面に向かって投げ打って回す「投げ独楽」*prikfol* である。同種類の遊びはブリュッゲルの「謝肉祭と四旬節」の喧嘩にも画かれている(図17)。



図17 ブリュッゲル「独楽回し」(「謝肉祭と四旬節の喧嘩」の部分、油彩、1559年)

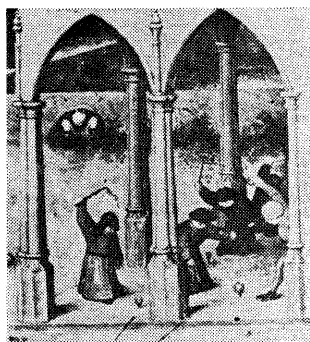


図16 ブリュッゲル「投げ独楽」「鞭独楽」(「子供の遊戯」の部分⑭⑮)

独楽、とくに土器製のそれはすでに紀元前三五〇〇年のバビロニア時代から知られている。もちろん古代ギリシャ時代にもホメロスやアリストパネスの文学に言及されている。シュリーマンはトロイ発掘の際、土器製の独楽を発見した。またポンペイでも発見され、今日ナポリ

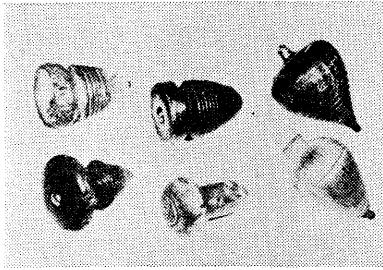


図19 「鞭独楽」(左4点)と「投げ独楽」
(右2点) 1920世紀。木製

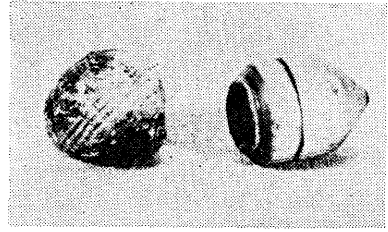


図18 「投げ独楽」左は1500年頃、直径4.7cm
高さ.47cm。右は1575年頃、直径4.1cm、
高さ5.8cm。木製

の国立博物館にその遺品をみる事ができる。なお独楽はギリシヤ語で *strombos*, *strobilis*、ラテン語で *trochus*, *turbo* と書かれる。

このように独楽遊びの歴史は古く、またその分布も世界中いたるところにあるといつてよいだろう。独楽の材質は一般には木製で彩色されたり、「投げ独楽」の場合は紐がしっかり巻かれるようにとボディに線溝が施される場合も多い。さら

に両種類とも金属の心棒がある(図19)。歴史的には「鞭独楽」の方が古いので、この遊具から説明しよう。

ブリュッゲルの画面には二個の「鞭独楽」がみられるが、奥の黒っぽい独楽は他の種類とも比べても細長く一番大きい。手前の鞭独楽はごく一般的なもので、その形は上部が円筒形をなし、下部が円錐形だが、その間に浅い段があるため、きのこ型ともいわれる。回し方はまず心棒の先きを少しばかり盛りあげた土の上に立たせ、手で回すか鞭で打つか、また鞭を少しばかり心棒に巻きつけて回す。時には靴や木靴の下で回すこともある。回りはじめたら、鞭で胴部を打つのだが、鞭は棒の先きに一本ないし数本の紐を縛ったものである。ブリュッゲルの画面では二人の男の子とも二本の紐の鞭を使っている。十七世紀のオランダの版画(図20、21)やタイル画(図22)でも一本ないし二本のみのものが圧倒的に多い。

「投げ独楽」は梨形で、上にも心棒が突出している。遊び方は、まず紐を心棒からボディの上までいっぱい巻きつけ、紐の先を小指と薬指にはさみ、親指と人差し



図21 E・シリマン「鞭独楽」(図20と同じ)



図20 E・シリマン「鞭独楽」
(J・カッツ「結婚について」
1642年より) 銅版



図22 「独楽回し」オランダのタイル

く一人の男の子の動作には相手の独楽を狙う一瞬の緊張感にみながっている。このように「投げ独楽」の方が動作も激しく、ゲーム性も富んでいる。なおタイル画(図24)をみると、回っている独楽を人差し指と中指には

指で上部をしっかりとつかんで、上から地面をたたき割る(オランダ語の kappen, beuken) ようにして投げる。マルテン・ド・ヴォスの版画(図23)にみられるように、時には地面に線で輪を描き、倒れた独楽「legstol」をめがけて自分の独楽を投げ当て、輪の外へ出してしまふ。あるいはおはじか小石を押し出したり、すでに回っている相手の独楽をめがけて、自分の独楽を打ちつけ、枠外に出す。ブリュッゲルの画面には輪の線はみられないが、右二人の男の子の遊びはまさしくとそれに該当する。と

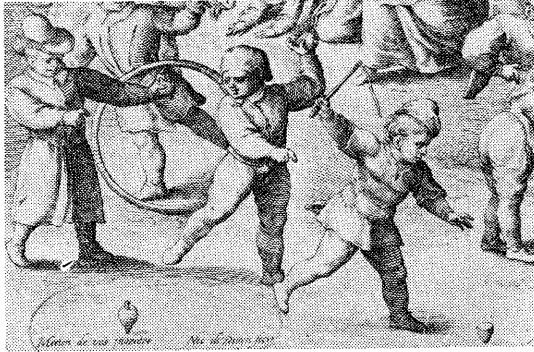


図23 マルテン・ド・ヴォス「独楽回し」(ド・ブライン
発行「幼年期」の部分) 1615年頃

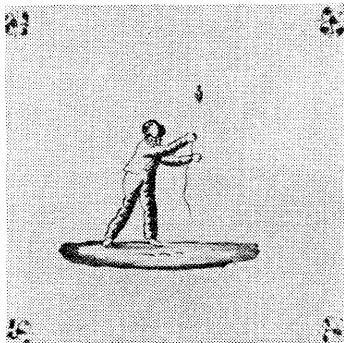


図24 「独楽遊び」オランダのタイル1825年頃

さみ、他の手の平にのせたり、空中に飛ばしたりする遊び方もある。ところで独楽が文学の中にどう描写されているのだろうか。古くはローマの詩人ウエルギリウスが『アエネーイス』の中で、娘をアエネーイスに嫁がせることに反対した母アマータの乱れた気持を、独楽に譬えてこう述べている。

「あたかも時に子供らが、

大きい輪になり独楽あそび、しながら遊びに熱中し、鞭をふるって人気がない、広間をせましと追いまわす、廻れる独楽もさがらに、(独楽はこのとき打ちおろす、鞭にしばかれあちこちに、曲線描いて走せあるき、

無邪気な子供らその上に、好奇のまなこを注ぎつつ、まわる黄楊の木の独楽を、あやしみながらなおもまた、鞭でそれに活を入れる)、それに劣らず激烈に、体を動かしアマータは、幾多の都市の真ん中を、

猛き市民のあいだ抜け、ひたすら狂って荒れまわる。^{注10}」

なお興味深いのは一二四〇年頃に書かれたティロルの無名詩人の「悪妻について」と題された詩である。^{注11}そこでは虐待される夫は鞭打たれ、くるくる回りをする独楽に譬えられている。

「鞭に打たれくるくると回る独楽を、彼女は決して得なかった、

有無を云わさず私を鞭で

回す時は。」

(つまり彼女は玩具ではなく、人間独楽をもっている)。

またエリザベート・フォン・テューリンゲン(一二〇七—一二三一年)も、子供の遊具を次のように列挙した。「種々の子供の遊戯。ガラスや土で作られた独楽や沢山の指輪、それに他の沢山の小間物」^{註12}

さらに十七世紀のオランダの作家ルーマー・フィッシャーの寓意詩(一六一七年)も人生への教訓にあふれている(図25)。

「多くの人びとは十字架と強いられた生活のもとに置かれてはいるかぎり、道徳的である。

しかしもし鞭がとり除かれるならば、

彼らは神への仕えをやめ、怠惰になる。

ちようど独楽が打たれ、鞭打たれないと、

すぐにはずみがなくなり、横たわってしまふように^{註13}。

他方、フィッシャーは「各自が己れの時を」という詩

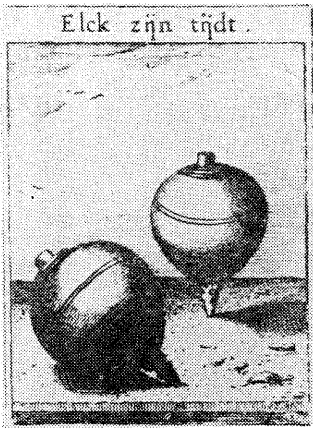


図26 「独楽」(図25と同じ)

独楽をつぎのような詩(一六二五年)で教訓的に謳っている。「強い紐に鞭打たれると、独楽は床の上で生々



図25 「独楽回し」(ルーマー・フィッシャー『寓意人形』より 1614年) 銅版画

「われわれ人生は多くの不安に溢れている。しかし誰もがふらふらして回転するよりは、静かで平和な安らぎを求め^{註14}る。」

同時代のオランダの詩人ヤコブ・カツツも鞭打たれ、ようやくくるくる回る

と回る、

ひとが強く打てば、それだけよく回る。

しかし鞭の力が少し弱まると

独楽は土の上に倒れてしまう、

そしてもう一回も回りはしない、

永遠にひとつの塊になってしまふ、

ひとは悲しみと不幸なとき以外、

決して自分のことに注意しない。

苦しみのない生活をしていると

無為のためすぐ錆がでる。

見よ、富に恵まれた人間が休むと、

彼の心は情欲に走る。^{注15}

このほか十六世紀のドイツの詩人

ニコラス・ロイスナーは鞭で独楽を

回すことができても、人はそれが何

処へ行ってしまうかコントロールで

きかないという事実を、「怒りは一

時的な狂気」の比喻に用い、狂った

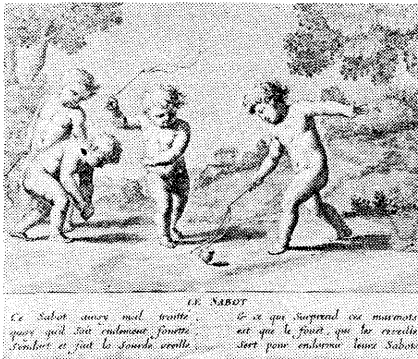


図27 クローディン・ブゾネ・ステラ
「鞭独楽回し」(図4と同じ)

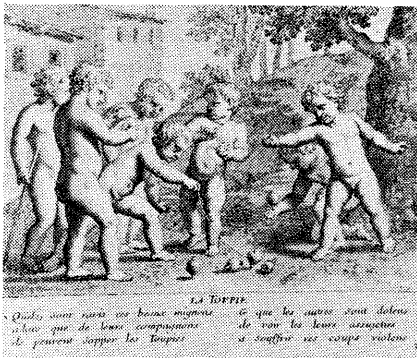


図28 クローディン・ブゾネ・ステラ
「投げ独楽回し」(図4と同じ)

激怒は突然彼を駆り立て、どこへ向かわせるか分からない、という風に描写している。^{注16}あるいは十七世紀の初期、スペインの詩人オロスコ・コバルビアスも、鞭打たれてはじめて動き回る独楽を惨めな賤しい下男の性質に譬えて^{注17}いる。

最後にジャック・ステラの「鞭独楽」Le sabotの詩に注目しよう(図27)。

「鞭独楽はこのようにひどく扱われ、

乱棒に鞭で打たれているのに、

眠ったり、知らんぷりをする。

この子供たちをおどろかすものは、

彼らを目覚めさせる鞭であり、

それは独楽を眠らせるのに役立つのである。^{註18}

ただしここで独楽を「眠らせる」endormir というの

は、独楽が最大のスピードで静かに回っている状態を意味している。

つぎにステラの「投げ独楽」la toupie に注目しよう

(図28)。

「この可愛い子供たちは、

どんなに歓喜していることか。

仲間と一緒に独楽をぶつけ合うことができぬから、

他の子供たちは、

強い一撃に耐えている、自分の犠牲者(独楽)をみ

ることがどんなにか悲しいことであらうか。^{註19}」

以上、独楽に関する種々の時代の詩を紹介してきた

が、主に「鞭独楽」の方に、怠惰な人間への教訓が含ま

れていたようにも。

(東京工芸大学)

註1 Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter Bruegel den Oude verklaard*, Antwerpen 1941, p. 7.

註2 J. Bolte, *Zeugnisse zur Geschichte unserer Kinderspiele*, 1909 p. 398.

註3 Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 15.

註4 Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspiel 1560*, Wien 1957, p. 31.

註5 V. Zingerle, *Das Deutsche Kinderspiel im Mittelalter*, Innsbruck 1873, p. 48.

註6 Jacob Cats, *Kinderspel*, Saint-Omer 1855, p. 62. (リットンと題)

註7 De Meyere, *op. cit.*, p. 8.

註8 G. Hartmann en E. Lens, *Het J&M Amsterdam 1976*, p. 107.

註9 Hills, *op. cit.*, p. 35-36.

註10 ヲノエキリヲス『オホキニ』上(泉井久之助訳、岩波文庫)四五八-四五九頁

註11 "Von dem tühlen Weib" (Hills, *op. cit.*, p. 43).

註12 Elisabeth von Thüringen (1207-1231), *Diuitisica*, I, Buch 3, IX, "Die heilige Elisabeth" (ca. 1300), p. 389 f.

註13 Roemer Vischer, *Het derde schock van de sinnepoppen*, Amsterdam 1614 (reprint: *Profijtelijke Vermak* 1968, P.149) (巻三題)

註14 Roemer Vischer, *Zinnepoppen*, Amsterdam 1614, No.20 (第一題)

註15 Cats, *op. cit.*, p. 32-34.

註16 Nicolas Rensner, *Emblemata*, No. 17, Frankfurt 1581.

註17 Orozco Covarrubias, *Emblemas Morales*..... No. 76.

註18 Stella, *op. cit.*, No. 3.